

Das Phänomen der mittelalterlichen Griffelglosseirung in Europa 中世ヨーロッパにおける石筆による注釈の書き込みについて

アンドレアス ニーヴァーゲルト、チューリヒ大学（スイス）

※ 以下の日本語訳で「古高ドイツ語」といい、「古代高地ドイツ語」というのは、どちらも「THE OLD HIGH GERMAN(英語)」の訳語である。

この春、私はすばらしい発見をした。私は吉澤康和博士と小林芳規博士の本に出会ったが、その本には、日本の角筆記録の実にすばらしい写真の写しが記載されていた。これらの石筆記録を見て、その外観から、私は自分が長年取り組んでいる古高ドイツ語の石筆による注釈を直ちに思い浮かべたのである。

図1

これは9世紀の写本に記録された古高ドイツ語の石筆注釈である。

日本語、韓国語、古高ドイツ語の石筆記録における、明白な視覚的、技術的類似点は、我々の素晴らしい学会のポスターでも見ることができる。

特に驚くべき事だが、世界をまたいで複雑に結びついた学問の時代に、違う地域の同じ現象を研究することができていたのに、実際には互いのことを全く知らなかったという可能性が長年あったということに気がついて、私は自分を恥ずかしく思う。しかしながら、私はアジアの角筆記録についてこれまで全く知らないままだったのだ。

ここで、日本語、韓国語、中国語の写本における石筆記録を研究なさっている皆さんに、簡単な概観という形で、石筆注釈化の現象がヨーロッパの写本においてどのように表されているかを紹介したい。その際、皆さんの角筆記録の研究にとってはすでに馴染み深い、多くの問題点をお聞かせすることになるだろう。この問題点は、一面、ヨーロッパ特有のものでもある。石筆記録の写真を使って様々な観点を説明したい。ヨーロッパ石筆注釈の写りの良い写真がごくわずかしかないのが残念なのだが。

この研究報告は、大きく3つに区分される。

1. まず、ヨーロッパの写本における石筆記録の現象を紹介する。さらに、どれほどこの記録が伝えられているのかについて述べる。そして筆記方法を、その歴史的、実際的なコンテキストにおいて概略する。
2. 次にこの研究の状況に触れ、今日の歴史的な言語の段階の研究において、石筆による注釈が出くわす注意点や疑問点を話し、同時に古高ドイツ語における石筆注釈研究の歴史と現在の研究の現状を述べる。
3. 三番目に、歴史言語学における石筆による注釈の意義を考え、この研究においてどのような展望が開かれるのかを示す。

図 3

ヨーロッパにおける中世の筆記活動の大部分は、羊皮紙写本の形で残されている。一つにまとめられた羊皮紙のページから成る本物の本が問題となる。これらの本は、初期のキリスト教の修道院で作られ、主に聖書に関する記述、神学的論争、また古典の作者の作品がラテン語で書かれた。

図 4

このテキストは羽ペンとインクで書かれている。

図 5

当時の写字において、羽ペンとインクによる記述が唯一の筆記方法ではなかったということは、最近になるまでほとんど注意を払われていなかった。インクによる筆記方法の他に、色を使わない筆記方法が使用された。この筆記方法では、文字は写本を刻印するか押印することで書かれた。

図 6

様々な用具を使って書かれたことは注目に値する。我々には、その用具を知る機会がほとんどない。木、骨、金属でできた用具をイメージしてみるとよい。用具は、その断面によって区別される。

図 7

用具は尖っているものとそうでないものと 2 つに大別される。この 2 つの記録されたタイプを研究するためには様々な照明(証明?)が必要となる。この 2 つのタイプは、術語的にも区別される。刻印 *Einritzungen* という語を常に用いるのではなく、羊皮紙を成形する際

に筆記用具で羊皮紙が刻印されたかどうかによって、刻印と押印 *Einprägen*、もしくは刻印された(英語: *scratched*)と押印された(英語: *impressed, graven*)記録を区別すべきである。

石筆は、修道院の写字室には大抵備わっており、様々な目的に使用されたことはよく知られていることである。

図 8

1. 花柱は、写本を生産する際に用いられた。花柱は空いた写本のページにテキストを書くスペースを作るために使用された。石筆でテキストの境界をつけたり行を引いたりした。また、巻数や章の見出し、もしくはテキストの開始という形によってテキスト配列の指示が石筆で書かれた。石筆は、構想や草案を書く道具でもあり、その際に色のない筆記用具として最も適していたのである。

図 9

2. 石筆は、記述の講義において重要な役割を果たした。中世ヨーロッパの石筆技術の起源は、古代の蠟版に記述する技術に見られる。古代から知られている蠟版は、中世の写字でも用いられた。初心者は、最初の筆記練習や文字の形を練習するときに蠟版に書いた。石筆は、元々筆記用具として使用されたのである。

図 10

3. その上、石筆はテキストを勉強する際に使用された。このことは、石筆で書かれた注釈や注解のある数多くの写本が証明している。この注釈と注解は、アクセント、他の読み方や発音の手助けとなるような韻律に関する指示、様々な注解と同じく正書法や文法的な訂正のような形式的な注釈に分かれる。図には、ギリシア文字で書かれた単語を、おそらく読む手助けとしてラテン文字に翻訳された単語が映っている。

図 11

注解は、広い意味で注釈の概念にまとめられる。これは、9世紀の写本の欄外に書かれた注解である。この写本にはボエティウスの作品が書かれている。

テキストと関係がなく、おそらく個人的なことが石筆で書かれたのである。

図 12

4. 石筆は記号を書く用具として使用された。図には、1000年頃に成立し、聖人伝が書かれた写本のいおける記号が映っている。

石筆は、写字室で作業する際に様々な用途で使用されたことが確認されている。石筆記録を機能的に評価する時に、この多様性は念頭においておかなければならない。

図 13

石筆による記述に話を移すことにする。石筆を使った筆記方法は、テキストの異なる形式に合わせて用いられた。石筆で書かれた注釈は、数多くの記述形式のひとつに過ぎない。しかしながらこれらの注釈は、石筆による筆記方法が研究によって注目されるきっかけとなったのである。

注釈は、補足的にテキストに添えられた説明と解されている。注釈は、写本のテキストと同様に多くの場合ラテン語で書かれた。ラテン語は、当時の教会や教養の言葉であった。しかし、その他に民衆語による注釈も存在していた。この注釈は、基本的に個々のテキストの単語を民衆語に翻訳したものだった。このような民衆語の注釈をこの図は示している。ラテン語の *stipulentur* に注釈が施されている。この単語の上に古高ドイツの訳である *infestenon* が書かれている。

この民衆語の注釈は大変興味深いものである。この注釈が、かつての言語の段階を示す重要な証拠となるからだ。民衆語の注釈という現象は古高ドイツ語の一例を機能的に示している。他の民衆語の注釈のことは後ほど話すつもりである。

図 14

古高ドイツ語は、ドイツ語において文書によって伝承されたもっとも古い言語の段階と解されている。古高ドイツ語は、8世紀半ばから11世紀までの言語を今日に伝えている。注釈の伝承形態は、古高ドイツ語による文書の始まりである。つまり、ドイツ語のも最も素晴らしい文書は、古高ドイツ語の注釈という形で残されている。

図 15

これは、8世紀以来ラテン語の写本に書かれた民衆語の単語である。これらの単語は母国語による注と対比されている。これは、今日でも外国語のテキストを読む際に行なわれている。古高ドイツ語の注釈は、明らかに説明が必要であると思われるラテン語の注釈なので

ある。注釈は、行間においてラテン語の見出しの上や欄外に書かれたり、単語集として注釈集にまとめられたりした。

図 16

この図は、そのような注釈を示している。

なぜ古高ドイツ語の文書を初めて試みたのか、どのような理由から初めて注釈が成されたのか、そして民衆語を用いた注釈者の動機はなんだったのか、これまでほとんど知られることがなかった。

図 17

古高ドイツ語の注釈は、古高ドイツ語を知る上で重要な意味を持つ。これは伝承された古高ドイツ語の単語数である。30,000 以上の語彙目録のうち 10,900 語がテキストに書かれているが、それに対して 2 倍半以上の 27,000 語が注釈に書かれている。4,400 語はテキストの中にしか見られないが、その 4 倍ほどの 20,000 語は注釈にしか書かれていないのである。

図 18

中世の写字において、羽ペンによる筆記と石筆による筆記は 2 つの独立した記録法のバリエーションであったことをまず確認しなければならない。色を使った筆記法と刻印による筆記法は、記述の種類上根本的に異なる。注釈の記録では、この 2 つの記述法が使われる。注釈は羽ペンや石筆を使って書かれた。これは、決して石筆で書かれることがなかったと言われている主要なテキストとは異なっている。この図は、石筆と羽ペンを使って注釈が施された箇所である。羽ペンによる注釈と石筆による注釈は、注釈研究において長い間異なる扱いを受けてきた。石筆記録に関する学問的な取り組みは、最近に至るまで羽ペンによる注釈の膨大な研究の陰に隠れていたのである。

羽ペンで書かれた注釈は、古高ドイツ語の研究において当初から重要な研究対象であった。色がなく石筆で刻印、押印された民衆語の注釈は長い間黙殺されていた。最近になってやっと、民衆語の注釈は古高ドイツ語の重要な原典であり、長いこと未発見のままになっていたことが認識されるようになった。後ほど話すつもりであるが、石筆による注釈の意義は、結束の固い専門家たちの間ではずっと以前から期待したほど認められていなかったのである。(さらに知られていないのは問題点の多い色鉛筆による注釈である)。

石筆による注釈は今日に至るまでよくないイメージがある。この注釈は、実に問題のある

資料であり現在の版は確かに不十分であるとみなされていた。資料を理解するための問題点が重要である。石筆による注釈は、読めないほど状態が悪く、その判読はせいぜい推測によるしかないとみなされてきた。定期的な校訂や新しい読み方によって懐疑的な見方がなされている。最近になって石筆による注釈が知られるようになったにもかかわらず、この注釈は写本の注釈調査に含まれていない場合がある。判読する際に味わった失望感を背景に研究の説がうまれたことがしばしばあるように思われる。

そのため、石筆による注釈に関する理論はしばしば一面的な結果に終わることがある。そして、この記録は体系だっていない自主的な注であり、「個人的な」、次に読む人のことを想定していない注、また生徒による注だとみなされてきた。その注の中にタブー視された、隠された意図を推測したり、この読みづらさは写本を大切に扱ったためとみなされたこともあった。しかし、このような説は石筆による注釈の質的な多様性をかんがみるとせいぜい個別の場合に当てはまるに過ぎない。はっきりと力強く書かれきちんと読める石筆の注釈は数多く存在しているのである。

熟練していない観察者は、石筆による注釈をすぐに判別できず、まして読むことはできないというのは事実である。その点から、石筆による注釈は第三者に読まれることはなかったと推論するのは早計である。この読みづらさの原因をおよそ記録の見た目の質だけでなく、不十分な研究条件の中から探るべきなのだ。

石筆による注釈の研究をたゆまず専門に扱う人が、様々な困難に出くわすことは疑いようがない。さしあたり、この研究に携わる人は、言語学的な専門知識を越えた能力と知識が必要である。石筆注釈の研究者は、鋭い眼力と十分な忍耐力を持たねばならない。

さらに言語学の他に文字学、資料学、テキスト学に関する知識を使いこなさなければならない。経験は大変重要である。しかし、その経験は様々な研究の過程で身につくものなのだ。

外的な状況から障害が起こるかもしれない。大変貴重な写本の正本を使用する際、例えば照明や、正本を利用できる時間などの法的な制約が研究に限界をもたらす。これらの制約は、図書館によって曖昧だったり厳格だったりする。特に貴重な写本は、決して見ることが出来ないかもしれない。さらにヨーロッパの石筆注釈の研究には、写本の閲覧室で判読するために使用される石筆注釈の研究のための特殊な科学技術がない。将来的に角筆スコープがこの弊害を取り除いてくれるのかもしれないが！さしあたり、我々は 100 年前と同じく光の弱いランプと虫眼鏡で作業するしかないのである。

図 19

今述べたような調査に関する問題は、羽根ペンで書かれた注釈を研究する場合とは異なり、石筆注釈研究にのみ現れたもので、こういった問題はその研究史にも反映している。

石筆注釈の研究が本格的に始まったのは、羽根ペンで書かれた注釈の研究に比べてかなり遅れてのことであった。それはたとえば石筆注釈が羽根ペンによる注釈よりも後に認識されるようになったというようなことではない。そうではなく、それらは同時期に発見されたのである。200年前、バイエルンでは教会財産没収の過程で、数多くの修道院が閉鎖され、膨大な量の写本がミュンヘンの国立図書館に移された。当時古高地ドイツ語の注釈に取り組み始めていたゲルマニストや図書館員たちは、1806年の段階ですでに石筆注釈のことに言及している。古代高地ドイツ語で書かれた注釈を膨大に収集したエリアス・フォン・シュタインマイヤー (Elias von Steinmeyer) もそれらを1879-1922年に編纂刊行している。しかし石筆注釈を体系的に扱い始めたのは古文字の専門家ベルンハルト・ビショッフ (Bernhard Bischoff) で、1928年のことである。彼は図書館を巡りながら石筆注釈を大量に記録した。石筆注釈研究はごく最近になるまでこれらの記録を元に行われていた。石筆注釈の出版に関する専門的な問題はヨーゼフ・ホフマン (Josef Hofmann, 60年代)、ハルトヴィヒ・マイヤー (Hartwig Mayer, 70年代)、そしてエルヴィーラ・グラザー (Elvira Glaser, 90年代) などによって徹底的に行われている。グラザーは石筆注釈の全領域を根本的に扱い、その研究は理論的・方法論的に一つの重要な指標となっている。しかし彼女が知っていた全資料のリストは、ほどなく一時的なものであることが判明している。

すなわち、1995年以来体系的に行われたかなりの量の調査のおかげで、古代高地ドイツ語の石筆注釈がさらに発見されたのである。このことはまず写本の調査をきっかけに出版される本に書き留められる補足に関係してくる。これはもちろん驚くべきことではなく、期待されていたことである。その一方で、石筆注釈の全体が再発見されたことは驚くべきことである。しかもそれらの一部は注釈の研究者たちによってすでに何度も見られてきた写本に含まれていたのである。そしてもう一つ、新しい石筆注釈写本の発見が、これまで見過ごされてきた個々の注釈にではなく、注釈全体に極めて包括的に関わっている場合が頻繁にあったということも驚くべきことである。

図 20

例をいくつか挙げる。Cim 18547b 写本には約 500、ベルリンの Ham. 542、ローマの Biblioteca Vaticana Reg. Lat. 348 には約 1000、ザンクト・ガレンの教会図書館 219 にはおよ

そ 150, そしてザンクト・ガレン教会図書館 70 と Clm 18765 にはそれぞれ 100 ほどの古代高地ドイツ語で書かれた石筆注釈が発見された。

図 21

2006 年の時点での概況を述べると、次のようになる。古代高地ドイツ語（そして古ザクセン語）の注釈を収録した一番新しい 2005 年に出版された写本のカatalogには 1309 冊の写本が含まれており、そのうち 85 冊の写本に石筆注釈が見られる。現時点までに発見されたものでは、古高ドイツ語の石筆注釈を含んだ写本が 90 冊知られており、これは注釈写本全体の約 7%にあたる。石筆注釈の写本の数は、最近の数多くの新たな発見物からすると、さらに増えると考えてよい。

これらの数字はもちろん言語で書かれた資料の数については何も示していない。羽根ペンの注釈の場合と同様に、写本間の石筆注釈の数にはかなりの揺れがある。いくつかの写本には 1000 以上の記入が見られるが、全くもしくは部分的にしか解読されていない記述もたくさん含まれている場合がある。現時点までになされた報告はそのケースのほとんどにおいて暫定的なもののみなされている。というのは、写本はたいてい一人の個人によって調査されたからで、再調査が行われた箇所では、ほぼ規則的に訂正や補足がなされているからである。

これらの新たに発見された物は、たとえば石筆注釈の地理的、方言的、時間的区分など、それまでの見解を訂正する根拠となる。この図は、石筆注釈が古代高地ドイツ語の時代を通じてその言語圏全体で書かれたということを示しているが、中世高地ドイツ語の時代にはもう見られなくなる。

図 22

今日の石筆注釈研究の状況は様々な理由から困難なものとなっている。最も近い時代に発見されたものは研究を不確かなものにはするけれど、しかしそれは注釈研究者たちが石筆注釈に焦点を当てて写本を体系的に調査することが例外的にしか行われてこなかったことを示している。難解な記述だけでなく、極めてはっきりしたものも見過ごされてきたのである。この写真は最近になってようやく新たに発見された石筆注釈であるが、この写本はゲルマニストによって繰り返し調査されてきたものである。現在行なわれている研究では再調査をきっかけとして信頼度が非常に異なってくる。

専門家の不足も問題である。先に述べたような注釈研究者の間の不信感や挫折感が新し

い入門者にとっての障害となっている。新しい体系的なアプローチによって、研究や解説が時間的に極めて集中したものとなりうることは明らかだが、そのことが不安を抱かせることも当然ありえる。専門化することが特に実用的となるのはオリジナル写本を用いて独学する場合だけであろう。

・ 専門家だけでなく、資料から必然的に必要となる協力者、ないしは一定の規模を持った枠組内での条件やプロジェクトも不足している。

それに対して図書館の方はどんどん楽観できるものとなってきている。様々な場所で立派な研究状況ができつつある。図書館の業務の姿勢は多くのケースにおいて協力的で、保護規則と研究計画との間の関心の衝突はしばしば熱心に、そして非官僚主義的に解決される。しかし解決できない問題もある。たとえばあまりに貴重なので金庫から持ち出すことを許されないような写本の場合である。一冊しかない写本を保護するための照明に関する規定はおそらく解決されないであろう。それは多くの場所で石筆注釈の調査に不都合ではないくらいの光の比率という方向に向かうと思われる。ランプの使用はたいていの場合絶対に必要である。我々の写本閲覧室の散光では、石筆で書かれたものがそれを用いるといか見えやすくなりそれゆえ有用であるかという印象は得られない。

図 23

古代高地ドイツ語の研究にとって石筆注釈資料が極めて大きな意義を持つと考えられるようになってくると、数多くの問題がより先鋭化してくるようになると思われる。

この意義というのはまず、今日の知識状況によると古代高地ドイツ語の最も古い証拠が石筆注釈で伝承されているという点にあるのではない。これら古代高地ドイツ語最古の注釈の場合に話題となるのは、おそらく 8 世紀前半のものと思われるエヒターナーハ (Echternach) 修道院の写本の石筆注釈であるが、これがその写真である。

民衆語の文字による最も古い証拠となるものが石筆注釈で伝えられているということは、文書化の歴史にとって重要である。それは多くの言語において同様のことが見られるからである。

図 24

・ 古代高地ドイツ語の最も早い時期の証拠が石筆注釈という形で伝承されているのは、エヒターナーハ修道院からの写本においても同様である。古代アイルランド語の最も古い文章、7 世紀初めのダブリンの写本 Trinity College MS. 55 に書き込まれたものも石筆注釈である。

図 25

スラヴ語の文字伝承の場合も同様に初めは石筆で書かれている。9世紀初めのものではないかとされているチューリヒの写本 ZB Ms. C78 の石筆注釈はそのケースである。

民衆語の石筆注釈は、その中にまだ知られていない資料がたくさん潜んでいるという点からも当然重要だと言える。石筆注釈の発見によって新たに発見された文章の増加には驚くべきものがある。

図 26, 27

石筆注釈のさらなる重要性は、それが我々に注釈記述者の作業の仕方に関する情報を与えてくれる可能性を持っているという点にある。このようにして最近になってようやく石筆による下書きという機能が視野に入るようになってきた。C1m 18547b という写本では筆ペンによる暗号的な注釈が石筆注釈によって準備されている。この二つの図は、羽ペンによる注釈が石筆注釈によって準備されている様子を示している。こういった例からは、注釈をつける作業が計画的に行なわれていた事がわかる。

記入方法の質の違いは石筆が様々な機能を持っていたことを示していると見ることができる。このような注釈の下書きはしばしば判読困難で、暫定的なものと理解されている。

図 28

それに対して他の石筆注釈は非常にはっきりと読むことができる。というのもそれらは明らかに独立した注釈として計画されたものだったからである。

石筆で書かれたものには、とりわけ当時の照明の状況や人間の知覚能力に関する情報が含まれている。

チューリヒ大学では目下のところ中世における情報伝達性に関して、国の重点的研究の枠組みの中で石筆注釈に関するプロジェクトが進行している。その際、まだ知られていない注釈の研究と並んで、機能的な問題にさらに特別な注意が払われるようになってきている。新しい研究の試みでは、石筆注釈はあらゆる観点で徹底的に意図されたものであるとみなされている。つまり、石筆を用いた場合でも、書かれたものが後で用いられる、すなわち読まれるという目的を持って書かれていたという考えから出発しているのである。このことから、石筆の技術は目的に応じて用いられたとみなすだけの価値があるものだと条件付けることができる。こう考えることで初めて、民衆語に関してだけでなく、それが文字化

へとつながる過程に関してもたくさんの情報が得られるのである。

機能に関する新たな認識は角筆文献のような様々な文化圏の石筆注釈の研究からも期待されている。特にそのことゆえに私は広島に来られたことを感謝したい。

まとめ

中世には、羽ペンとインクだけではなく、石筆を用いても書かれていた。この技術は下書き作業やテキストに手を加えたりする場合に用いられた。テキストの注釈もその中から把握されるものである。この石筆注釈はしばしば民衆語で書かれていて、古代高地ドイツ語、古ザクセン語、古英語、古アイルランド語、古スラヴ語のような言語の歴史的段階の研究の重要な資料である。石筆注釈はそれらの最古の証拠として特筆すべき重要性を持っている。同様にそれは中世におけるテキスト生産の重要な作業過程を明らかにしている。最近発見されたものによって伝承の数は驚くほど大量に増えた。しかしこの重要な資料の研究はかなりの問題に直面している。これらは資料の研究にあたっての多様な問題から、研究において相応の敬意を得ることの困難さまで多岐にわたっている。